

印象記「機会詩としての宮沢賢治短歌 歌壇における『ゲーテとの対話』受容と関連させて」

本発表で最初に取りあげたのは、大正 10(1921)年 4 月に賢治が父と伊勢神社へ旅したときの一連の短歌(歌稿 B 所載)だった。

賢治の短歌は「つまらない」(岡井隆)と評される一方で、「ユニーク」(塚本邦雄)、「独創性」(佐藤通雅)があるとも評されてきた。佐藤通雅は、伊勢参宮歌を含む旅行詠は「完成度」は「高い」ながら「リズムも旧く、すでに特異さは影をひそめている。作者不在というに近い」と評した。この時の歌は、座談会で「齋藤茂吉の戦争歌」と同じ(小池光)、「パターン」の詩(岡井隆)とも評された。

佐藤はのちにこれら伊勢参宮歌を「旅行詠にまじえるかたちで神社・仏閣を祈願する」「釈教歌」「神祇歌」であると捉え直し、それは「動機がちがいにによるもので」「創造力の失墜とはまた別のことだ」との理解を述べた。

一方、岡井隆は『茂吉と現代』(1996)のなかで「ゲーテに由来する〈機会詩〉の概念」に触れ、「その状況(いはゆる大状況)を共にした人々の記憶の中には、文明の歌の印象は、まことにあざやかに残ってある。しかし、その状況を共にしなかつた人に向つて、その歌の魅力は説きにくい」ような性格をもつと捉えたうえで、たとえば「戦時下の短歌、特に前線に出て行つて戦ひながら作つた将兵の短歌」を例にあげた。

こうした先行論を受けながら、塩谷氏はこれらの詩群をエッカーマン『ゲーテとの対話』を参照することで「機会詩」として位置づけた。『ゲーテとの対話』のなかでは「詩はすべて機会詩(ゲレエゲンハイトゲデヒト)でなくてはならぬ」と述べられていた。というのも「現実が詩に動機と材料とを与え」るものであり、「特殊な事件も、詩人が取扱つて普遍的な詩的なものになる」からだという。塩谷氏は、機会詩とは、なんらかの体験的な「現実」とかかわつた「機会」が動機となりまた織りこまれたテキストで、その「機会」にみあった表現(釈教歌、神祇歌のような儀礼的な定型)が選び取られていたのではないかと捉えた。

他方で、賢治は機会において書く詩を「心象スケッチ」としても書いた。短歌でも「ユニーク」で「独創性」をもつと評されたものがあつたように、賢治の詩歌は、空想的で観念的な性質よりも「機会」に動機づけられたものとして捉えられると論じた。

以上のように本発表の概略を理解した。

子規や茂吉の「写生」理念には、仮想的な立場で書くのではなく、固有の(私)がなんらかの「機会」に遭遇したことに基づき(私)の身体の体験機会に準拠して表出されるべきだという思想があつた。

賢治の固有性は、(私)の身体に準拠した「心象」を基盤としながら、他方で、近代科学的な宇宙観や自然観あるいは法華経の世界観が「心象」の「言葉」に幅と奥行きを与えていることにあるようにみえる。

塩谷氏の発表からは逸れるが、本大会では佐藤伸宏氏が「永訣の朝」を外国語訳を参照して論じていた。「永訣の朝」に即していえば、トシに迫る死という機会は、トシの口からは「あめゆじゅ」と呼ばれ、「あめゆき」「みぞれ」「雪」とも呼び代えられる。そして「銀河や太陽 気圏などとよばれたせかいの／そらからおちた雪のさいごのひとわん」「雪と水とのまつしるな 二相系」とも表現される。さらに「天上のアイスクリームになつて」もしくは「兜率の天の食になつて」とも表現されていた。

「機会」は誰が言葉にしても同じになるわけではない。伊勢参宮歌のようにある種の定型に近づくことにもなりうる。が、より柔軟繊細に固有の身体、「心象」に基づこうとすると、賢治に固有の「心象」にそなわった世界観に結びつけられて独創的表現が現れる理解したらよいだろうか。(山崎義光)